

杵乃杜

秩父神社社報
杵乃杜(ははそのもり)

第 64 号
(大 祭)

令和 3 年 12 月 3 日



山川も

草木も人も

共世の

いのちかがやけ

新しき世に

モノの生命からコトの命へ——生命観を正す。

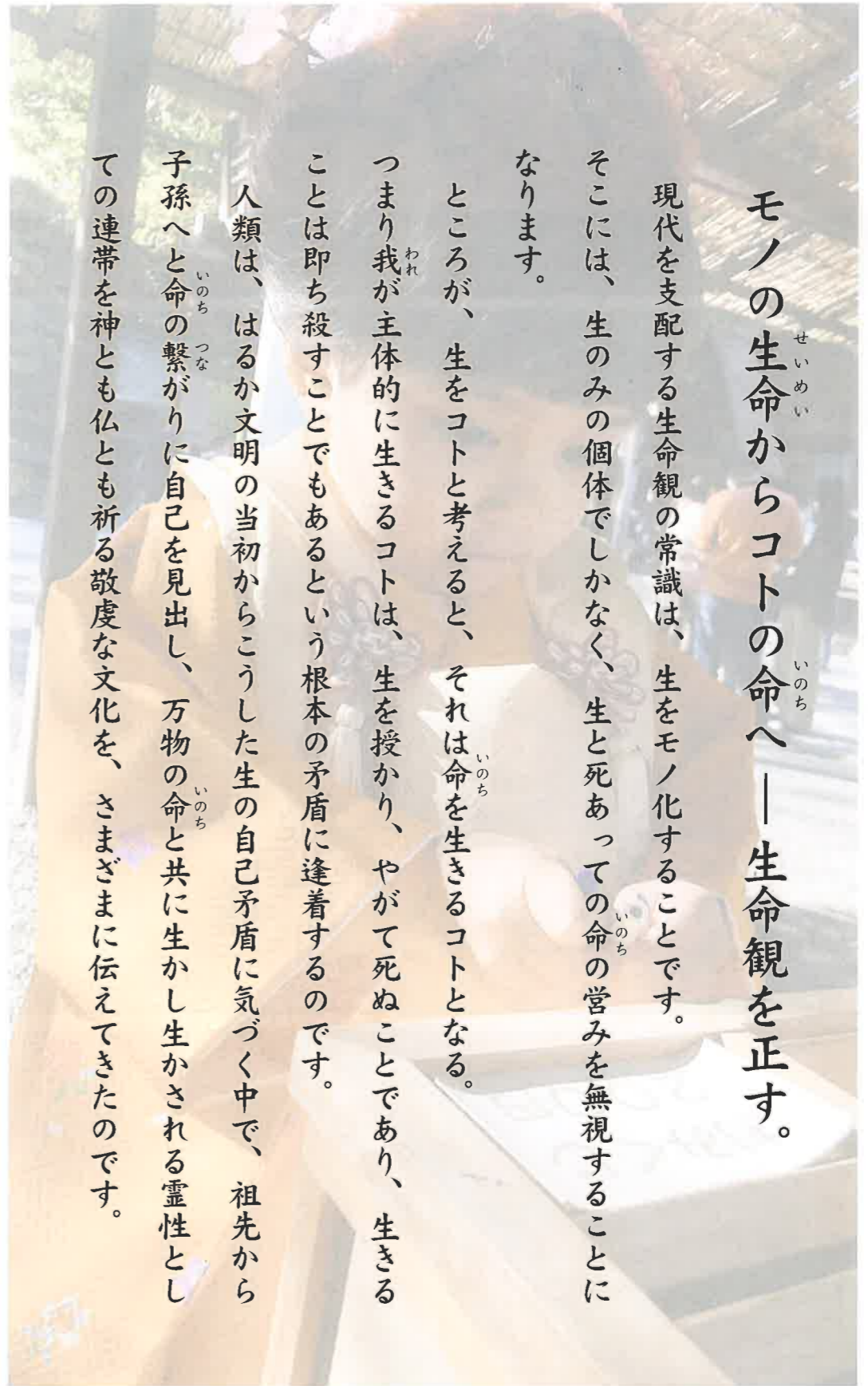
現代を支配する生命観の常識は、生をモノ化することです。

そこには、生の中の個体でしかなく、生と死あつての命の営みを見無視することになります。

ところが、生をコトと考えると、それは命を生きていくコトとなる。

つまり我が主体的に生きるコトは、生を授かり、やがて死ぬことであり、生きることは即ち殺すことでもあるという根本の矛盾に逢着するのです。

人類は、はるか文明の当初からこうした生の自己矛盾に気づく中で、祖先から子孫へと命の繋がりに自己を見出し、万物の命と共に生かし生かされる霊性としての連帯を神とも仏とも祈る敬虔な文化を、さまざまに伝えてきたのです。



解説 秩父神社(62)

杉山正司

◆ 秩父神社を巡る

三口の刀剣と武蔵武士(七)

秩父神社と武蔵武士に関わる名刀の連載も、今回で結びとなる。最終回は、大河原氏が新天地の播磨国で、秩父への先祖からのDNAを表す刀剣を紹介する。

太刀 勝光

法量 長さ八〇・六センチメートル

反り三・六センチメートル

(表) 備前國住長船次郎左衛門尉

勝光作

(裏) 波賀上之方八幡宮為御劍末代

／丹治大河原備中守之清奉
籠之也／天文九年八月吉日

鎚造、庵棟、鍛えは板目肌、刃文は湾れに互の目。刀身の表に「八幡大菩薩」、裏に「キリク」の梵字が彫られている。「キリク」は、阿弥陀如来・千手観音菩薩・如意輪観音菩薩を表すとされる。

作者は、前回紹介した秩父神社所蔵の脇差と同じ、長船次郎左衛



波賀八幡神社

門尉勝光であり、本刀は勝光のみで打たれている。次郎左衛門尉勝光の銘は、長享三年(一四八九)から天文九年(一五四〇)頃に確認されており、未備前に活躍し、秩父神社の脇差とほぼ同時期に作刀されたと考えられる。

さて、本刀は、銘文から、宍粟郡の大河原備中守之清が、波賀上之八幡宮、(現在は波賀八幡神社)に奉納するために勝光に依頼して作刀させた太刀であることがわかる。しかも次郎左衛門尉勝光として年紀の確認できる掉尾を飾る作である。

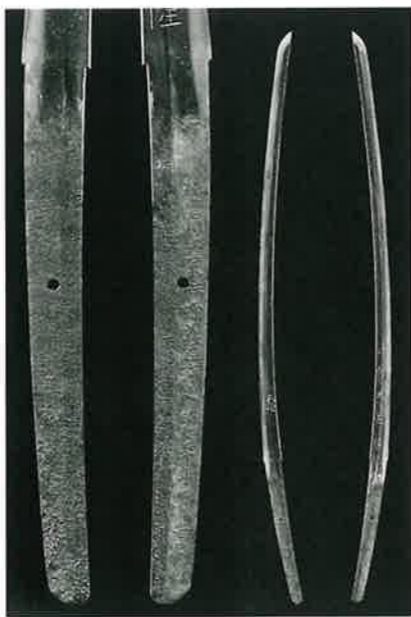
現在宍粟市指定有形文化財となっており、指定解説銘板によれば

ば奉納した大河原備中守之清に於いては、地元では千草城主であったという。

丹治を冠した大河原氏であることから、秩父出身の大河原氏であることは間違いない。

波賀八幡神社は、大河原氏の所領である宍粟郡三方西郷内に鎮座している。おそらく先祖の時基の例に倣って太刀を、備前長船派の勝光に作刀を依頼し、この地で氏神として崇敬するようになった波賀八幡神社に奉納したのであると考えている。

前回の秩父神社の脇差は、同じ長船次郎左衛門尉勝光の手も関わっていること、しかも梵字が彫られていること、脇差は磨上げられているが、元は現在より長寸であった可能性があること(「そうだとすれば太刀であった?」)などが指摘でき、両刀には共通点がある。これはあくまで筆者の推測に過ぎないが、ほぼ同時期に大河原之清が、彼に連なる人物が、時基の



波賀八幡神社太刀
埼玉県立歴史と民俗の博物館 特別展「由来伝来名刀の一千年」図録より転載

古例に倣って本貫地の氏神である秩父神社と新領地の氏神である波賀八幡神社に太刀をそれぞれ奉納したのではないだろうか。秩父を離れて二二〇年余、大河原氏は遙か故郷と祖先以来の氏神秩父神社に思いを寄せていたのだろう。

なお、昭和三十七年にこの太刀を紹介した文献(景光、景政合作太刀に見る添銘並びに勝光太刀)『刀剣美術』七八号)では、刀身が被災している可能性が指摘されている。昭和四十年に太刀が研磨されているため、現状からは被災していたのかはわからない。ただ茎の銘文に判読しにくい部分があるため、被災の影響による可能性は指摘できる。

(埼玉県立歴史と民俗の博物館主任専門員兼学芸員)

「神社とマチ文化」——秩父神社の場合

宮司 蘭 田 稔

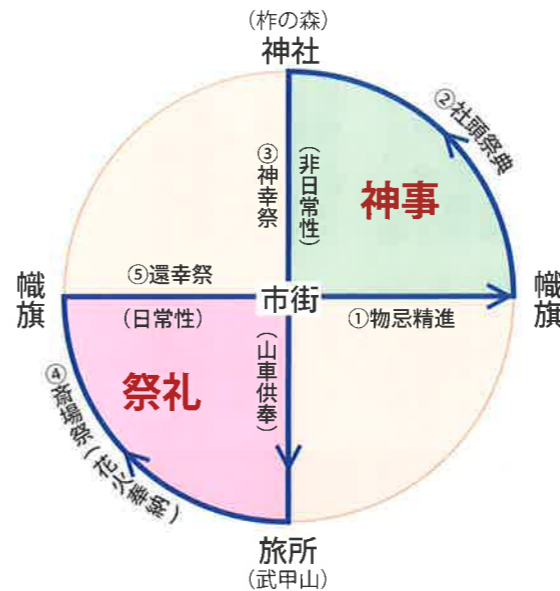
今は「秩父夜祭」の名で知られる弊社の例祭は、毎年十二月三日夜の神幸祭を中心に前後六日間の神事を指して齋行されます。江戸時代には地元の氏子集落が「大宮郷」と名乗り、毎月の一と六の日に市が立つ六斎市がありまして、特に旧曆霜月十一月の一日から六日まで妙見の大市(たかまち)と称され、東北から関東にかけての市商人が蟬集したといえます。妙見市(まち)を終える六日市(まち)を済ますと、翌日から日を追って市が「妙見崩れ」と称し、荒川筋の秩父街道を移動し、熊谷宿に出て中山道から江戸を目指し、氷川の大宮宿から調宮の浦和宿を経て、最終的には江戸の板橋宿でめでたく年末の歳の市となるというわけでした。弊社も当時は「秩父大宮妙見宮」として世に知られていたのです。近世の武蔵国には、三大宮と云って「多摩大宮」今の東京・杉並区の大宮八幡宮、それに「足立大宮」今のさいたま市の一宮氷川神社、そして「秩父大宮」があったのです。

秩父神社は、平安中期に成立とされる『国造本紀』に「知知夫国造」とある記事によると、人皇十代崇神天皇の時代に八意思金神十世の孫 知々夫彦命が国造(くにのみやつこ)に任じられて大神を拝祠したとあります。国造制は、七世紀半ばに成った律令国家での国司(くにのみこと)も制

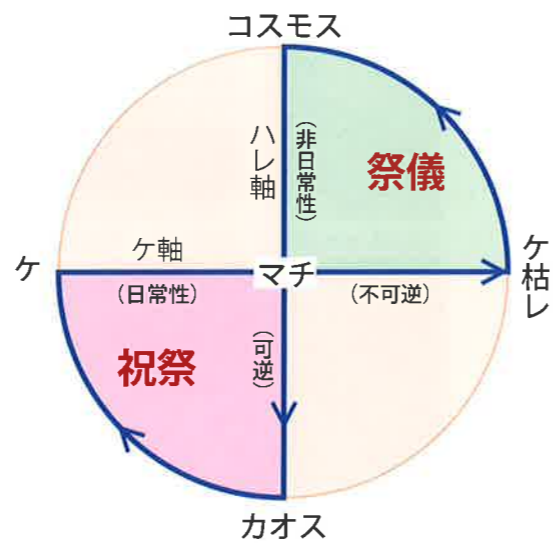
度に一世紀ほど先立つ氏姓国家の地方官制で、『国造本紀』に記す弊社の創建記録は、武蔵国の成立以前に創建された古社の証しでもあります。古社にふさわしく旧曆の二月と十一月に古伝の神事があって、それが祈年(としごひ)に当たる如月二月三日(現四月四日)の田植神事と、晩秋の新嘗(にひなめ)に当たる霜月十一月三日(現十二月二日)の秩父夜祭ということになります。宝永六年(1709)丑二月十五日に地元代官所に提出したと記す「秩父領百姓年中業覚」には、正月二〇日から二月三日までと、十月二〇日から十一月三日まで、いずれも十日余り、秩父郡内では「妙見神事にて」男性は竹木伐採を控え、普請鳴物、田畑鋤入れの自粛、女性には絹木綿の業も差し控えるなど、年に二度の風土祭祀、春先の豊作祈願と晩秋の豊穰感謝との大切な神事祭祀に先立つ物忌み精進の設定が注目されます。

これには、日本古来の農業集落がもつ山水風土と一体の霊的生命観が潜在しており、地域の霊的共同体(イノチのコミュニティ)が日常的にはケからケ枯れへと不可逆的に衰退する一方の生命力を、まずは日常的な十日ほどの穢れを忌避する潔齋期間に続く、非日常的なハレの「神事」と「祭礼」で可逆的に清新なケに蘇生せしめることで、具象的には、春先の田植祭で山谷に籠もるイノチの霊性を水神として迎え、晩秋の夜祭に山神として山谷に歓送する祭礼を成就することになります。要は、地域共同体の日常的な霊的生命力をケ(穢)と表現し、その力が不可逆的に衰退するのをケガレ(穢れ)と認知することで、この状況を非日常的なハレ(晴れ)の神事祭礼をもって新生なケの霊的生命体を取り戻すの

図版2 秩父夜祭の再生システム



図版1 マチとマツリの再生システム



えば人間の生命を利己的な生存のみに捉えて社会的、文化的、霊的な命(いのち)の、人間存在なればこそその霊的価値を忘れかねない状況ではないか。

現代の日本社会は、都会と地方を問わず国際的な資本主義経済と科学技術文明との圧倒的な影響下にあつて、在来の地域コミュニティが解体され、急激な少子高齢化にも晒されて住民たち本来の社会性が希薄化した、いわゆる無縁社会にむき出しの個人が互いに孤立しかねない状況ではないか。その兆候のひとつが、現今の生命観にあつて、たと

そうした時代状況の中で、我らが故里、秩父の地域社会が、たとえ大都市圏の一郭で豊かに便利な生活条件に恵まれずとも、幸いに残された自然風土の豊かさや人情味の篤い近隣社会とをもって、昔ながらに共有する霊的生命観、すなわち地域に息づく季節のイノチ、ケからケガレ、ケガレからハレの夜祭、ハレから新たなケの蘇えりをユネスコ無形文化遺産とする心意気を未来に伝えることが大切でありましょう。

です。(図版1・2参照)

図版1 マツリとマチの再生システム

ケーケガレハレハレケ

図版2 秩父夜祭の再生システム

物忌み十日ー社頭例祭ー夜の神幸祭

御旅所祭(山車・煙火奉納)ー還幸祭

【表紙歌解説】

山川も 草木も人も 共生の

いのちかがやけ 新しき世に

平成十三年(西暦2001年)宮中御歌会始

召人 上田正昭 献 詠

上田正昭(うへだまさあき)氏は、平成二十八年三月に享年八十八歳で永眠された高名な日本の歴史学者。京都大学名誉教授だが、従四位、勲二等瑞宝章。京都・亀岡の小幡神社宮司で歌人でもあり、歌会始にも招かれて表紙の歌を遺された。人も自然万物も共に霊的ないのちをもって共生するといふ日本人古来の生命観を巧みに詠みあげて、しかも二十一世紀の新年をことごとく秀歌。現在、当社の蘭田宮司がつとめるNPO法人社叢学会の代表理事の初代で尽力された。なお、生前に遺された「見解では、詠歌

【表紙絵解説】

この度の表紙は、修理復元中の御社殿西面より代表的な彫刻「お元氣三猿」と致しました。日光東照宮「見ざる・言わざる・聞かざる」の三猿とはまったく逆さまのお猿さんです。中世以来の庚申の観念から、太陽が沈む西面に三匹のお猿さんが「よく見て、よく聞いて、よく話す」という仕草で彫刻されています。

庚申の観念とは、人間の腹中には三戸と呼ぶ三匹の虫がいて、庚申の夜に人が眠ると体内から抜け出して天上に上り、天帝にその罪悪を告げるので人は生命を奪われると伝える。その為この日は夜を守るので庚申講等の習俗が起った。



とうほうさく 東方朔 (修理前)



とうほうさく 東方朔 (修理後)



しょうりけん 鐘離権 (修理前)



しょうりけん 鐘離権 (修理後)



三猿 (修理前)



三猿 (修理後)



ひちようぼう 費長房 (修理前)



ひちようぼう 費長房 (修理後)

◆ 秩父神社妙見講

自 令和 三年 九月
至 令和 三年十一月

九月四日 荒川妙見講
九月五日 浅海忠講元外九十九名
中村講
九月五日 岩田雄一講元外百七十四名
小鹿野講



去る十月十四日、埼玉県立秩父農工科学高等学校森林科学科三年生七名作成によるベンチが奉納されました。当日は、奉納報告祭を執行、その後平成殿にて成殿に寄贈式が行われ、齋主を務めた宮司より感謝を申し上げました。

◆ 奉納報告
この度、市内在住の崇敬者より金老百万円の御奉納がありましたのでご報告いたします。

◆ ベンチ寄贈
去る十月十四日、埼玉県立秩父農工科学高等学校森林科学科三年生七名作成によるベンチが奉納されました。当日は、奉納報告祭を執行、その後平成殿にて成殿に寄贈式が行われ、齋主を務めた宮司より感謝を申し上げました。

ふくろう
梟だより

◆ 職員辞令
町田 詩歩 巫女見習を命ず
(七月一日付)

◆ 柞乃杜前結婚式報告
東京都足立区 葦原史崇・エルリ トリスナ 様
さいたま市中央区 小関喜晴・智美様
秩父市上野町 強谷尚史・美紀枝様
上尾市本町 廣瀬勝信・春菜様
秩父市大宮 千島良太・由衣様
東京都世田谷区 家内翔太・優里様
秩父市上宮地町 中山明俊・理恵様
未永く幸せな家庭をお築き下さいますようお祈り致します。

高橋良衛講元外六十二名
九月十二日 上町講元
浜中啓一講元外二百五名
十月三日 上宮地講
大島耕造講元外百三十五名
十月十七日 中町講
久保忠太郎講元外百八名
十月二十二日 東町妙見講
福井直壽講元外八十六名
十月二十三日 桜木講
濱田雄司講元外二十四名
十一月七日 番場妙見講
今井明講元外八十二名
十一月十七日 野坂講
中村正義講元外百十四名
本年より、野坂講中村正義様が新に講元に就任されました。どうぞ宜しくお願致します。

御社殿保存修理工事進捗状況

設計監理 ㈱文化財工学研究所

はじめに

現在進行中の秩父神社御社殿修理工事は、社殿外部の彩色（建物に直接描かれた地紋及び彫刻）や飾り金物の修復を主とした修理工事で、令和元年度から令和五年度までの5カ年度をかけた長期に渡る文化財修理工事になります。

◆ 今回の彩色修理について

昨年の社報でもお伝えいたしました通り、修理前の社殿の彩色は、昭和42年の修理工事で塗り直されたものであり、今回の修理では基本的に現状踏襲とし、修理前と同様の配色で塗り直しを行っております。但し、表現が過剰になりすぎないように全体的に顔料(色味)を統一すると共に、伝統的技法と異なる部分が確認された場合は、類例に倣った修復といたします。

なお、彫刻彩色や社殿の桁、内法長押、組物などに施される地紋は、

顔料を掻き落としながら配色を確認し、見取り図を作成して完成の配色を確認してから実際の彩色修理に取り掛かります。

おわりに、西面の修理は令和3年度中の完了を予定しており、進捗としては折り返し地点を通過しました。拝殿正面と本殿背面の彩色修理を残すのみとなりますが、今一度気を引き締めて業務に従事して参りますので、よろしくお願ひ申し上げます。



本殿妻 (修理前)



本殿妻 (修理状況)



鳳凰・桐 (修理前)



鳳凰・桐 (修理状況)



雉の親子 (修理前)



雉の親子 (修理後)

◆ 神宮大麻・曆頒布式齋行報告



去る十月二十一日、秩父郡市神社関係者大会が開催され、大会に合わせ神宮大麻・曆頒布式を齋主当社園田権宮司、祭員秩父青年神職会会員奉仕により齋行致しました。

式には支部長を務める当社園田宮司を始め郡内九十四社の神職、三峯神社責任役員山口民弥様を会長とする秩父郡市神社氏子総代会役員の皆様にご参列頂きました。

明治天皇さまの思召しにより、全国で神宮大麻が頒布されてから、令和四年には百五十年を迎えようとしています。

◆ 3Dプリンター「つなぎの龍」

この度、原製作所、ミマキエンジニアリングと晃和ディスプレイの三社共同の手によって、つなぎの龍の彫刻のレプリカが作製され奉納されました。

このレプリカの元となったつなぎの龍の彫刻は江戸時代初期の彫刻職人、左甚五郎の作品とされており、この企画によって後世に残す記録としても有意義な機会を得たことに感謝を申し上げます。



今回レプリカを作製するにあたってデジタル3Dデータを用いたフルカラー3Dスキャナー・3Dプリンター技術を活用し、実物の六分の一サイズで色・形共に精巧に作製されました。これを元に十二分の一サイズの絵馬を作成中です。



こちらは令和四年お正月に頒布予定をしておりますのでご期待ください。ご奉納頂きましたつなぎの龍の彫刻のレプリカは平成殿一階にて公開中です。是非ご覧下さい。

◆ 奉賛者御芳名簿(10)

令和三年七月〜令和三年十一月迄
神社扱い
十万円 井上公子
一万円 獅子倉雅人・彩華
南 早苗

◆ 新人紹介

巫女見習 町田 詩歩



平成八年一月二十日生まれ。秩父市大畑町出身。秩父農工科学高等学校卒業。

七月より巫女見習いとして奉職させて頂くことになりました。先輩の方々のご指導のもと、ようやく日々のお務めにも慣れてきたところです。
この伝統ある秩父神社で奉仕さ

編集後記

さて頂ける事は大変有難く思っております。各地域から、様々な思いで参拝・祈願などに訪れる方々に親しみをもっていただけるような巫女になれるよう、初心を忘れずに頑張っていきたいと思っておりますのでどうぞ宜しくお願い致します。

■ここに社報柞乃社第六十四号をお届けいたします。

■今年もまたコロナ禍の為、昨年同様に例大祭諸祭典は縮小斎行となりました。例大祭が近づくと、屋台ばやしの色音が街中にこだましていたのが非常に懐かしく、寂しい気持ちでおります。来年こそは以前にも増して例大祭諸神事が盛大に行われるよう日々の祈りを続けて参ります。



※ 本報の用紙は再生マツト紙を使用しています。

令和三年(2021)十二月三日
編集 秩父神社社務所
〒361-0044 埼玉県秩父市番場町一三
TEL 0494-221026
FAX 0494-224155
印刷所 有限会社 拡文社印刷所
〒361-0044 秩父市東町二七一八